
とある存在の世捨て人（ワールドアウト）

竜王の白翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールドアウト
とある存在の世捨て人

【Nコード】

N8827S

【作者名】

竜王の白翼

【あらすじ】

何年か前、世捨て人^{ワールドアウト}と呼ばれる能力があまりにも危険すぎて学園都市はおろか世界から存在を消された少年たちがいた。彼らは復讐するべく学園都市へと舞い戻った。

一方上条当麻は相変わらずの不幸で平和な日々を送っていた。そこに雷破 翔一という転校生がやってくる。転校生、世捨て人が来る時、再び学園都市に闇が訪れる…

この世の者ではない者ゝWORLD OUTゝ（前書き）

駄文ですがどうか読んでください

この世の者ではない者」WORLD OUT」

学園都市某所に存在する淡い光を放つ窓の無いビル。

その中に1つだけ設置されたビーカーの中に満たされた液体の中で逆さまに宙釣りとなっている男にも女にも、大人にも子供にも見える学園都市統括理事長アレクスター「クロウリーは目の前に映し出されたディスプレイを眺めていた。

「おやおや、まさかこのタイミングでこの世の者ではない彼らが動き出すとは」

何やら問題が起こっているらしいが彼の表情はこれから起こることに対して楽しそうな表情だった。

ディスプレイには『WORLD OUT』の文字だけが映っていた。

「どうせ復讐に來たのだろつが今の学園都市をなめない方がいい」

そう呟くとディスプレイを閉じ、楽しそうな笑みを浮かべた。

「ふあゝあ、久しぶりに見たなゝこの近未来な風景」

学園都市北ゲート前 午前1時

金髪なボサボサ頭に真っ白なシャツ、黒いズボンと身だしなみに気を使ってそうもない格好の少年がいた。

「何のんきなことを言っているのですか。少しはしっかりしてください」

その隣には黒いコートに眼鏡をかけたいかにも博識そうな少年が杖を回していた。

「アンタさあ、いつになったらその呑気さ直るわけなのさ？」

少し後ろには赤い髪の長いポニーテールのワンピースを着た少女がいた。他にも5人の少年少女がいた。

「直す気はないよ。この方が楽しいんだ。復讐に来たとはいえさ、もっと気楽に行こうよ。楽しめればいいんだし」

ニコニコ笑いながらゲートへと近づく。それに警備の男たちは気付

いた。

「何者だお前たち」

その問いに少し考えるところ答えた。

「この世の者ではない者さ」

10秒後、ゲートは破壊されずただ警備の男が倒れているだけだった。ただ、彼らは既に学園都市へと侵入していた。

「さあて、楽しもうかな」

彼らは何事もなかったような表情で歩き出した。

午前1時 学園都市北ゲート 異常なし

この世の者ではない者ゝWORLD OUTゝ（後書き）

感想宜しくお願いします

暗雲の訪れる前〜BEFORE〜1（前書き）

ちゃんと禁書らしくなっただろうか？すごく不安。

指摘があれば感想に書いてくれると嬉しいです！

暗雲の訪れる前〜BEFORE〜1

第7学区のとある高校の男子寮

現在午前7時半。その一室に住む不幸少年上条 当麻は風呂場で目覚ましを持ったまま驚愕するという何ともシュールな光景を繰り広げていた。

「久々に目覚ましが壊れなかった…奇跡だ」

何やら当たり前のことを言っているが前述の通り上条 当麻は不幸である。彼の場合、目覚まし時計は壊れて鳴りませんでした、の状況の方が多いのである。普通に壊れない日なんて滅多にないのだ。

「いや、これは大きな不幸の前触れなんだ。前だって遅刻して補習送りにされセルには遅れて何も無いのに転んで…」

この後1分間自身の不幸を振り返ると風呂場から出て着替えた。

台所へ向かうとベッドの上で居候である銀髪碧眼少女のインデックスがお祈りをしていた。

こう見えて彼女は10万3000冊の魔導書を完全記憶能力で記憶したイギリス凄教のシスターである。

お祈りの間は何を言っても聞かないため朝食の準備へ取りかかる。ちなみに献立はご飯ともやし炒めである。

朝食が出来、テーブルに置くとタイミング良くインデックスがお祈

りを終えてベッドから降りた。

「おはよう、とうま」

「ああ、おはよう」

挨拶すると手を合わせ日本恒例の「いただきます」を行おうとする
と笑顔だったインデックスの顔が一瞬で鬼の形相へと変化した。

「とうま、これは何かな？」

銀髪碧眼シスターは表情を変えぬままメインディッシュであるもやし炒めを指さす。

「…もやし炒めですが…」

上条は冷や汗を垂らしながら後ろへ後ずさった。

「いい加減あきたんだよ！もうかれこれ1週間計21食全てに出て
きてるんだよ！別の物が食べたいかも！」

「仕方ねえだろ！どっかの誰かさんのせいで上条さんちの家計は現
在進行形で火の車なんだよ！」

「問答無用なんだよ！」

上条の説得も虚しくインデックスが白い歯をむき出しにしながら飛
びかかり上条の頭に噛みついた。

「ぎゃあああああああああああああああああ！！！！不幸

上条が手を振りながら駆け寄ると

「うにゃあ!？」

何故か猫の鳴き声のような声を上げた。

「何だ？そんなに驚いたか？」

上条が不思議そうに顔を覗き込むと顔を真っ赤にしながら後ろへ飛びあがった。

「か、顔近いわよバカ!／＼／」

赤面しながら頭から電撃の矢を放つ。

「うわっ!」

上条はとっさに右手を構え電撃の矢に触れると、甲高い音が響き消滅した。

これは彼の右手に宿る幻想殺し（イマジンプレイカー）という能力で手首から先に触れた異能の力を打ち消すものである。インデックスの見解によると神の加護や運命の赤い糸をも打ち消すらしい。

「こんな近距離で放つって危ないだろ!」

「うるさい!アンタが悪いのよ!」

御坂は変わらず赤面したまま上条に向かって指さす。赤面している

理由は誰が見たってわかるが上条は全く気付かない。

「さっきから顔赤いぞ。熱でもあんのか？」

上条は右手を御坂の額に、左手を自分の額へ当てる。それによって御坂の顔は湯気が出そうなほどに赤くなっていき

「ふにゃー」

そのまま気絶してしまった。本来なら漏電するのだが上条の右手によって防がれた。

「ん？おい、御坂。大丈夫か！？」

とりあえず上条は御坂のゲコ太携帯を使い御坂の後輩である白井黒子を呼んだ。その待ち受けがペア契約の時のツーショットだったのだが急いでいた上条は気付かなかった。

能力である空間移動で駆けつけるなりバーサーカーと化した白井の鉄矢の嵐から全力疾走で逃げつつも学校へ向かうとどうにか遅刻せず済んだ。

息を切らしながらも教室へ入るなり2人分の拳が疲れ切った上条の顔へクリーンヒットした。

「な、何しやがる土御門！青髪！」

顔を抑えながら目の前の2人へ尋ねる。

「にゃー。今朝かみやんが常盤台の女の子といちゃついでるのを目撃したって聞いたんで親友から優しい鉄拳制裁を下してやったんだぜい」

「にゃー」だの「ぜい」という変な口調を使う金髪グラサン男は土御門 元春である。一見バカそうだがこれでも科学と魔術をまたにかける多重スパイだったりする。

「この世の中は平等に出来てるはずなのに何でかみやんばつか女の子に恵まれてるんやろうなあ」

青い髪、ピアスを付けた耳、エセ関西弁と特徴の強いのは青髪ピアス。当然あだ名である。

「優しい鉄拳制裁ってなんだよバカ！そして上条さんは女の子には恵まれてなんかいいえ！」

二言目が発せられた瞬間、教室の空気がたちまち明るいものからドス黒いものへと変化していく。その中からクラスの男子全員が上条

へと詰め寄っていく。

「な、何なんでせうか？このおさましい殺気は…」

上条は後ろへ下がっていくが男子の群れがじりじりと距離を詰めていき追い詰められる。全ての男子がソウルである拳を構え飛びかかろうとしたところで

「はい、みなさん。上条ちゃんの処刑は後にして席についてください」

上条のクラスの担任であるどうみても小学生にしか見えない月詠小萌が入ってきた。それと同時にクラス一帯からチツと舌打ちが聞こえたため上条は身震いした。

全員が席に着き出席を取り終えると小萌が嬉しいお知らせを告げた。

「ええ、実は今日転校生が来るのですよー」

その瞬間クラスから歓喜の声が巻き起こった。

「どんな女の子が来るんやろうな」

「女の子前提かよ。ま、上条さんには縁のない話ですが」

「かみゃん。どうやら制裁の規模を上げて欲しいみたいだよー」

3バカことデルタフォーが話していると小萌が話を続ける。

「今回の転校生は男の子なのですよー。残念でした野郎ども、喜べ

子猫ちゃん達―」

歓喜の声から男子の声が消え、女子の音量が上がった。

「それでは入ってくださいーい」

小萌が促すと教室のドアが開き、少しボサボサになった頭にそれに似合わないとても気さくそうな顔の少年が入ってきた。その少年は黒板に名前を書くと自己紹介を始めた。

「初めまして雷破^{らいは} 翔一^{しょういち}です！みなさんよろしく！」

自己紹介とともに笑顔でピースする。非常に明るそうな印象である。

「何と雷破ちゃんは大能力者（レベル4）なのですよー。みなさん仲良くしてあげてくださいーい。雷破ちゃん、席はそのツンツン頭の上条ちゃんの隣です。困ったら何でも聞いてあげてくださいー」

「わかったわかった」

翔一は自分の席に着くと上条の方を向いた。

「てわけでよろしくな！ちなみに能力は破滅^{デストボル}雷撃^{テック}ってんだ」

「ああ、こっちこそよろしくな」

上条は翔一の挨拶に笑顔で返した。

だが彼は知らない。翔一が後に起こる騒動に大きく関わることに…

暗雲の訪れる前〜BEFORE〜1（後書き）

次回はあの最強が登場します。
感想宜しく願います。

暗雲の訪れる前〜BEFORE〜2（前書き）

遅くなって申し訳ございません！

文でおかしな点がありましたらご指摘ください。

暗雲の訪れる前へ BEFORE 2

「うぎゃあああああああああ！！！！！何なのこの無限コンボはああああああああってミサカはミサカ驚愕してみたり！」

「あひやひやひやひやひや！！！！そのまま必殺技くらつとけやあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

この騒いでいる2人の内、最初の妙な語尾のついた10歳前後の御坂美琴に似た子は打ち止め（ラストオーダー）。シスターズ妹達の統率等を担っている特殊な存在である。だが、そんなことは全く感じさせないくらいに外見相応の性格をしている。

2つ目のセリフを言ったこれまた御坂美琴に似た高校生くらいのアオザイ少女は番外個体。ミサカワースト第三次計画で生まれた一方通行を倒すために生まれた妹達。シスターズミサカネットワークから悪意を抽出し実行するように出てくる。

2人は現在最近出たばかりの格闘ゲームをやっていたのだがこれ打ち止めの20連敗目である。

「つまんないなあゝ上位個体。もう少しミサカを楽しませてみなよ」

「ムキー！今度こそ本気を見せてやるってミサカはミサカはもう何度目かわからないセリフを叫んでみたり！」

格闘ゲームが出た同じころに番外個体の骨折していた右腕は治ったのだが治っていない状態でも打ち止めはゲームで勝ったことはない。治ったとなると尚更である。

21戦目。結果2ラウンド合計1分で番外個体の完勝。

「ごめん。つい本気出しちゃった。」

ニヤニヤ笑いながら打ち止めを見下す番外個体。打ち止めの目には涙が浮かんでいた。

「ここまで圧倒的だなんて……ってミサカはこの上なく絶望してみたり……助けてアナタ！ってミサカはミサカはアナタに飛びついてみる！」

涙目で打ち止めはソファに寝っ転がっている白髪の少年にダイブした。そして

「グホア!？」

見事に腹部に激突。少年は思いっきりむせた。

この少年は学園都市にいる7人しかない超能力者（レベル5）の第1位に君臨する一方通行である。白髪の頭に赤い目と獣を思わせるような姿をしている。

その天下の第1位は打ち止めの攻撃に呻いていた。

[illegible]

番外個体はその光景を前に腹を抑えて笑い転げていた。彼女は一步

通行が苦しむのを見るのが大好きである。

「オイクソガキ！テメエ何してんだ！」

一方通行キレるといかに、しまった！、という顔をしている打ち止めの頭に連続チョップをくらわせた。

「いたいいたい！ってミサカはミサカ相変わらずそこまで痛くないあなたのチョップに優しさを感じてみたり」

その言葉を聞いた一方通行はチョップを止めた。そして第1位の力を発現するためのチョーカーに手を伸ばしスイッチを押した。

ピー、という機械音が鳴ると同時にさつきと全く勢いの変わらないチョップを打ち止めにくらわせると

「ふぎやあああああああああああああ！！！！！！！！」
てミサカはミサカはマジで痛がつてみたり……」

彼女は頭を抑えて転げ回った。

彼の能力は触れた物体のありとあらゆるベクトルを操るというもので今のは衝撃のベクトルを操ったのである。

「ハッ！自業自得ってやつだなア」

特に悪びれた様子も見せず一方通行はチョーカーのスイッチを切った。

「第1位が幼児虐待したよ黄泉川」

番外個体は手をメガホンのような形にしてある人物を呼んだ。

「さつきから騒々しいじゃん。で、一方通行が何したじゃん？」

部屋にやってきた緑のジャージを来た女性は黄泉川愛穂。この警備員専用の最新設備の整った部屋の家主であり、前述通り警備員に勤めている。
アンチスキル

「上位個体に能力チョップ」

番外個体の言葉を聞き溜息をついた黄泉川は1枚の広告を取り出した。

「一方通行。罰として買い物に行くじゃん」

「…今回は罰ゲームとして行かせんのかよ」

「どの道行かせるつもりだったから理由があつた方がいいかと思っただけ。いつも通り買う物には丸つけてるじゃん」

「相変わらず俺には似合わねエな」

「そろそろ様になってきたと思うじゃん？」

チツ、と舌打ちした一方通行は黄泉川から財布と広告を受け取ると近未来的な杖を突いて立ち上がった。

「ミサカも行きたい！ってミサカはミサカは大復活！」

言葉通り復活した打ち止めは一方通行の腕に抱きついた。それに対して嫌そうな表情と呆れた表情を合わせたいかにも最悪といった表情をする一方通行。

「で、お前は どうするんだ？前みたいに無様な真似でもさらすか？」

一歩通行は番外個体に声をかけた。彼の言う無様な真似とは妹達の、一方通行と買物に行きたい、という莫大な嫉妬を受けてそれに逆らえず嫌々実行した結果、普段の彼女からは考えられない行動をして望まぬ一方通行との買物をするハメになったことである。

「くっ！…痛いところをつくね…仕方ないか。また変な嫉妬が来る前に後参しますよっと」

どうやら彼女にとってはトラウマらしく渋々買物に行くこととなった。

「それじゃあいつてきまーす！ってミサカはミサカは手を振ってみたいー！！」

こうして一方通行は2人とともに全く似合わない未来予想図を描きに行くのであった。

「いやあゝ、いつ見てもこの平和っぷりには慣れないねえ」

「いい加減慣れる。これが普通の光景なんだ」

一方通行と番外個体のような今まで悪の道を行き、抗ってきた者にとっては目の前に広がる人が賑わい笑顔でいる光景はあまりにも不自然であつた。

しかし、慣れなければこの光の世界では生きていけない。

そのため、こうして買い物などに行つて慣れようとしている。

「ようし到着！つてミサカはミサカは仁王立ちしてみたり！」

「邪魔だからとつと行けクソガキ」

何やら意気込んでいる打ち止めを入り口へ追いやり中へ入ると

「ねえ、第1位。まさかこれって…」

「クソ！黄泉川の野郎、ハメやがつて」

「もしやこれがセール？つてミサカはミサカは学習装置テストメントの情報と照らし合わせてみたり」

某ヒーローの第3の戦場が広がっていた。正確には卵を求めて人が群がっていた。

（冗談じゃねエ。慣れるとは言ったがこの中に飛び込めつてのか…）

一方通行にとつては最悪な状況であり、乗り越えなければならぬ壁であつた。広告の丸印しには卵が入っていたため避けることはできない。

だが、ある回避方法を思いつき悪い笑みを浮かべた。

「オイ番外個体。お前が行け」

当然指名された番外個体は嫌そうな表情をした。

「何でミサカなのさ。第1位が能力使つて突撃すりゃいいじゃん」

すると一方通行はニヤリと笑い逃げるための理由を言つた。

「こんなところで能力使つかよ。それになア、俺は障害者だ」

確かに彼は脳をやられ、ミサカネットワークで色々と補っているが右足は不自由のままである。証拠に杖を突いている。

「だつたら上位個体が！」

「このガキじゃ一瞬で人波の藻屑だ。だから」

苦し紛れの意見もあつさり駆逐し、一方通行は番外個体の肩に手を置き

「お前が行け」

視線の先には杖を突いたいかにも賢そうな少年がいた。そして彼からは飽きるほど体感してきた雰囲気が漂っていた。

「いかにも俺らと同じ道にいたやつだなア。だが関わんな」

「何でさ？」

「解放された奴かもしれねエしな。何より面倒くせエ」

「もしも何かしでかしたら？」

「その時は跡形もなく潰す」

打ち止めに聞こえないよう小声で話した2人は再び歩き出した。

こうして一方通行は少なからず関わってしまった。

世捨て人に…

暗雲の訪れる前〜BEFORE〜2（後書き）

更新は早くて一週間、遅くて三週間を目標にします。

次回は流れからしてアイツです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8827s/>

とある存在の世捨て人（ワールドアウト）

2011年10月8日20時51分発行